



「信徒発見」の意味するものと上智大学の役割

上智大学長 早下 隆士

経覧会の皆様には、日頃から大変お世話になっております。本学も創立 100 周年を迎え、ソフィア会の中に各学部、学科の同窓会組織の立ち上げを進めて参りました。とりわけ経覧会のこれまでの歴史と実績が、大きな牽引力となっていることは間違いありません。心から感謝したいと思います。私自身は理工学部に所属しておりますが、本学の特徴を活かした文理融合プログラムの必要性を考えた時、コンピューターを用いる経済動向のシミュレーション、統計解析、ビッグデータの活用など、一番に多くの接点を持っているのは、経済学部と理工学部ではないかと感じています。全学部が四谷のキャンパスにあるという総合大学の利点を大いに活かし、次の 100 年に向けた様々な学融合型の新しいプログラムを展開して行かなくてはならないと日々感じております。



本学の歴史を振り返りますと、1549 年にイエズス会修道士の聖フランシスコ・ザビエルが来日し、キリスト教を伝えると共に、西洋と東洋の架け橋となる「ミヤコに大学を」と願ってからおおよそ 360 年の時を経て、1913 年に上智大学が誕生しました。最初は商科、ドイツ文学科、哲学科のわずか 3 学科、15 名の学生からスタートした大学でした。100 年の歴史を経て、2014 年には総合グローバル学部が誕生し、9 学部 29 学科を擁する総合大学へと発展し、現在では 13000 人を超える学生に恵まれています。次の 100 年に向け本学は、スーパーグローバル大学創成事業に採択されました。まさに西洋と東洋を繋ぐ架け橋（コネクタハブ）の大学として先人達の期待に応え、他者のために貢献できるグローバル人材の育成は、社会より上智大学に課せられた大きな使命だと考えています。

昨年、福岡県久留米市の聖マリア大学で開催されたカトリック大学連盟の会議に参加し、その会議の中で、長崎純心大学の片岡理事長から、信徒発見の歴史に関する興味深い話を伺うことができました。聖フランシスコ・ザビエルの来日後、キリスト教の歴史は大変多難でした。ご存知のように豊臣秀吉の時代にバテレン追放が始まり、禁教令とともに 1597 年には、26 人の司祭や信徒が長崎で殉教しています。その後もキリスト教への厳しい迫害が続き、250 年余りもの間、キリスト教信仰は日本では閉ざされたままでした。1854 年のペリーの和親条約が結ばれたことに始まり、1865 年にフランス公使のために建てられた長崎の大浦天主堂に、隠れキリシタンとして生き続けた浦上村の十数名が現れます。大浦天主堂の司祭であったプチジャン神父に、一人の女性が「我らのムネはあなたのムネと同じ」「サンタ・マリアのご像はどこ」と尋ねています。これが、長崎での有名な信徒発見の話です。鎖国後の長期にわたり、世代を重ねて厳しい迫害の中で日本の中にキリスト教信仰が途絶える事無く受け継がれたと言う事実に感動を禁じ得ません。今年は、この信徒発見から 150 周年を迎える記念の年になります。

私は信徒発見という事実には、多くのメッセージが込められているように感じています。単にカトリックの教えを語るだけで、迫害の中、250 年以上もキリスト教信仰が生き続けることができたのでしょうか。おそらく織田信長の時代にやってきたイエズス会修道士をはじめとする多くの神父達は、日本の文化を理解し、日本語を学び、その地域に溶け込み、日本人と心と心の交流を行ったのでしょう。真の隣人となり、真の心の交流があれば、その心はその地域に必ず息づくということのまさに証明です。これこそが、グローバル人材に求められている重要な資質であるということを、はっきり教えてくれています。世界各国のその地域に根ざし、文化や宗教の多様性を理解し、その地域の言葉を使って交流する。その地域に問題があれば、それを見だし、その地域の人々のためにその問題を自ら解決して行くことのできる能力と言えます。イエズス会の教育の特徴は、イグナチオの霊操など厳しい教えの上に成り立っていると思いますが、その中心に Men

for Othersがあります。そして、その精神を受け継いで、現在の上智大学があります。近年日本では、布教を行うイエズス会修道士の数が減少しています。これは、修道士達の大きなミッションが、貧しい国において、助けを必要としている人々を救うことにあるためであると思います。成熟した日本には、その必要性が少なくなっているでしょう。しかしそれ故に、上智大学はその志を受け継いで、学生を指導し、育て、真の隣人となる人材を世界に送り出して行かねばなりません。本学の教育精神である Men and Women for Others, with Others は、先人達の思いを受け継ぐ大切な合い言葉なのです。

グローバル企業の国際税務による経営問題

上智大学経済学部 教授
西澤 茂



時価総額が約 90 兆円 (750 Billions) を超える Apple 社。その世界 No.1 企業がかかえる経営課題とは、どのようなものか想像がつかますか。それは、毎年、右肩上がりの業績をあげて多額の余剰資金が発生しているにもかかわらず、その資金を経営上の運転資金として十分に活用できていないというものです。

米国 SEC（米国証券取引員会）に提出された財務諸表（Form 10-K）では、Apple 社は、2014 年 9 月時点で、企業集団全体で約 19 兆円（155 Billions）の余剰資金をもっているにもかかわらず、米国本社が株主に配当する資金約 3.6 兆円（300 億ドル）が確保できず、約 1.6 兆円（120 億ドル）の新たな社債を発行して資金調達を実施したことが報告されています。

Apple 社の 2014 年現在の貸借対照表および損益計算書の要約データは、次のとおりです。

APPLE				
貸借対照表 2014年9月			(in Billions)	
資産の部			負債の部	\$120,292 51.9%
：	：		純資産の部	
余剰資金*	\$155,239	67.0%	資本金	\$23,313 10.1%
：	：		利益剰余金	\$87,152 37.6%
総資産	\$231,839	100%	負債、純資産合計	\$231,839 100.0%

*現金、現金同等物、投資有価証券の合計

APPLE		(in Billions)
損益計算書 2013年10月～2014年9月		
売上高	\$182,795	100%
売上原価、販管費	\$130,292	71%
営業利益	\$52,503	29%
：	：	：
税引前当期純利益	\$53,483	29%
法人税額	\$13,973	8%
税引後当期純利益	\$39,510	22%

		内訳	
		米国	米国以外
→		\$19,884	\$33,599
		\$12,484	\$1,489
		\$7,400	\$32,110
実効税率		62.8%	4.4%

このような問題が生じている主な原因となっているのが、余剰資金が留保されている場所。Form10-Kによると、余剰資金 155 Billions のうち 88.4% に相当する約 16 兆円 (137 Billions) は、アイルランドを中心とした米国外の海外子会社に留保され、その資金を容易には米国本社に還流できないために、米国本社での運転資金不足に陥っているのです。このような Apple 社の現状から、様々な疑問がわいてきます。

- ① Apple 社では、そもそもなぜ、これほどまでに巨額の余剰資金が生じているのでしょうか？
- ② グローバル企業では、Apple 社同様に、余剰資金を海外子会社に留保している傾向が強いのでしょうか？
- ③ 海外の子会社に留保されている余剰資金は、将来、どのような形で有効活用できるのでしょうか？

Apple 社は、売上高規模 20 兆円、純利益規模 5 兆円のモンスター企業。当期純利益は、株主総会決議による株主への配当、役員報酬の支払い等の分配活動を経て、残高が会社内部に留保され、翌年以降の設備投資、研究開発コスト等の運転資金として活用するための余剰資金となります。ただ、Apple 社では、自社の製造設備をもたず、中国、台湾等のメーカーに製造を委託する、いわゆる「ファブレス (fabless) 企業」としての特徴をもち、多額の設備投資は必要ないため、余剰資金が生じやすい傾向があり、その結果、2014 年現在、余剰資金の総額は約 18 兆円、実に総資産の 67%つまり 2/3 の割合にまで達しているのです。米国を代表する IT 関連のグローバル企業も、Apple 社同様に自社での製造設備を持たないため、多額の余剰資金が生じています。

さらに、それらのグローバル企業では、余剰資金をある特定地域の海外子会社に留保している傾向があります。たとえば、Google 社や Microsoft 社は、2014 年現在、企業集団全体の余剰資金のうち米国外の海外子会社に留保している割合は、それぞれ 60.1%、90.0% であると、SEC に報告しています。そこで共通して出てくるキーワードが、「国際税務戦略」という言葉です。

企業は、経営活動を行う子会社が存在する各国において、税引前当期純利益にその国の法定税率を乗じた額を

基礎とした法人税額を毎期負担し、連結損益計算書上で費用計上します。経営者にとっては、利益最大化の経営目標達成のため、費用最小化が重要な経営課題であり、企業集団全体の法人税額を可能な限り抑えたいというインセンティブが働くのです。そのために、実際に経営活動を行っている国と、その活動成果が帰属する国とを区分するスキームを構築し、法定税率の低い国に設立した海外子会社に集中して収益計上することで法人税額を最小化し、企業集団全体の当期純利益の最大化を図っているのです。その背後には、世界各国における企業獲得競争があり、様々な税法的恩典を設けて、税率を実質ほぼゼロに近い水準に設定できるようなスキームを提供する国も存在しています。たとえば、Apple 社では、主にオランダとアイルランドの税法を活用し、アイルランドに無形資産を管理する子会社を設立して、米国外での販売収益の大半をその子会社に帰属させる仕組みを構築していると言われています。その結果、2014 年の米国外での税引前当期純利益は、約 3.9 兆円 (34 Billions) であるにもかかわらず、法人税額は約 1,800 億円 (1.5 Billions) であり、その実効税率は、わずか 4.4% (= 1.5/34) に過ぎないのです。このような節税対策の結果、当期純利益を押し上げる効果がある一方で、余剰資金が特定の海外子会社に留保されるという事態を招いているのです。このようなグローバル企業の動向に対して、世界各国は、実質的な租税回避の疑いがあると認定し、様々な対応を始めています。米国議会では、Apple の CEO に対する公聴会を開催して、より詳細な課税実態の開示を求める動きがあり、OECD では税率の低い国々へ課税方式の改善などを求める動きも出てきています。

グローバル企業の国際税務戦略は、このような各国での税務問題をもたらすと共に、企業自体にも重大な問題を引き起こしています。企業では、親会社が株主への配当や新たな製品や技術開発のための研究開発を行うのが一般的ですが、親会社で必要とする運転資金を十分に確保できない状況が発生しているのです。それは、海外の子会社から親会社が存在する国への資金移動には、新たな税負担が発生するため、せっかく、国際税務戦略により軽減した法人税額の効果が半減してしまうリスクがあり、容易には本国への資金移動ができないからです。結果として、Apple 社では、株主への配当資金について、海外子会社から資金移動するうえで発生するコストよりも、社債を新たに発行して必要となるコストの方が割安であると判断し、新たな資金調達を行っているのです。企業集団全体では、潤沢な資金があるにもかかわらず、現行の運転資金に有効活用できない、まさに、多額の余剰資金が次のステップにつながらない、皮肉な結果となっているのです。

このような事態を招いているのは、直接的には経営者による当期利益最大化の経営行動が原因ですが、そのような短期利益最大化を容認してきたのは、企業の利害関係者である株主であるという点も重要です。現有株主が、単に短期的な利益最大化のみを追求する姿勢を経営者に求めるのではなく、持続的な成長を保つ長期的な視点に立って、潤沢な資金を必要な時に必要な場所で活用できる戦略構築を経営者に求める姿勢があれば、現行のような歪んだ状況は回避できたとも言えます。グローバル企業における国際税務戦略がもたらす経営課題は、経営者および株主双方により、より持続的な成長を重視した長期的な視点からの経営目標を重要な位置づけとする意識改革がなければ、なかなか解決の糸口を見いだせない課題であると言えます。

56 歳で起業して17 年

丸子勝基 (1964 年 経・商)



私は、1964 年 4 月、上智大学経済学部商学科を卒業しました。その後、今日まで、早 50 年が過ぎようとしています。かつての紅顔の美少年 (?) もすでに深い年輪を顔に刻んだ美老年 (こんな単語は無い!)。

上智大学の四年間は、柔道部に所属、現在も当時の後輩諸氏に励まされ、数年前に講道館柔道四段に昇段できた。最近では、彼らと毎月、柔道ならぬ月例ゴルフを楽しむ。私はもともと、運動神経は、さほどでもない。柔道をやり始めた中学一年の時も受け身を覚えるのに人一倍時間を弄したことを覚えている。ゴルフも同じだ。いつまでも百を切れないでもがいている。それでもそれはそれなりに楽しめれば良い。

大学卒業後、ファスナーの吉田工業 (株) に入社。3 年後に退社。一念発起、公認会計士受験生活に入るが、3 回受験後、断念。この間、勉強しながら生活を凌ぐための種々のアルバイト。将来を模索する 20 代後半の苦難の生活。若い時のこんな苦難の時代も顧みれば、その後の人生の滋養となったと解釈したい。

28 歳の夏のある朝。(このころは、新聞朝刊には多くの求人広告があった。) ふと朝日新聞の朝刊を見ると、見慣れない社名の求人広告が目飛び込んだ。「住友スリーエム、原価部員募集」とある。このころは、まだ公認会計士を断念する前であった。働きながら学べるかとすぐに応募。何回かの面接だけで、入社し、入社後二年目で、社内結婚。結婚生活間もなく受験生活のリズムが作れず、公認会計士受験を断念、その後、二人の娘に恵まれ、結局、約 30 年間、住友スリーエム (現スリーエムジャパン) に勤務。

住友スリーエム時代は、多くの仕事を経験した。原価計算を5年、内部監査を12年、生産管理を4年、マーケティングを5年、営業所長を2年、ガラスフィルムの営業を2年。経理畑、工場畑、営業畑とそして内部監査時代は、人事部から営業部、技術部、財務部と会社のあらゆる部門の実態とあるべき姿を考査し、改善提案を経営層に勧告するという仕事を12年経験。

1998年6月、住友スリーエムの独立支援制度を利用し、ガラスフィルムや内装材の工事を主とした事業を住友スリーエムの特約店として、八王子市の自宅にて、起業しました。

私は定年65歳まで勤務するよりも体力、知力が残っている50歳代にどんな事業をすべきか、いつも考えていたような気がします。

私のその後の経験から、次の5つの条件が同時に揃うことが、起業成功の必要条件と思っています。

- ① 健康で体力は充分か
- ② 家庭や周囲の協力が得られるか
- ③ 当面の資金力は確保できるか
- ④ 自分が扱いたいと思う好きな商材があるか
- ⑤ 差別化した事業（販売）戦略が描けるか

起業には事業家としての夢もありますが、むしろ重大なリスクも伴います。私が起業を決意した当時、日本経済新聞のコラムが参考になりました。起業を決意した息子に対して語りかける父親の会話が印象的でした。

「息子よ。起業し失敗すれば、土地も屋敷もなくなるだろう。しかし息子よ。土地や屋敷がなくなっても、誰も君の頭脳やハートまで取りに来るものはいないのだ。頑張れ！」

このコラムのベンチャー魂に、私は大いに勇気づけられ、救われた心境になったものでした。

起業を決意したものの、年齢はすでに56歳、さて、これから事業を始めていつまでやれるのか。私は自分が健康で仕事ができる期間を20年間と想定し、その20年間で4期に分け、立ち上げ期（春）5年、次が成長期（夏）5年、収穫期（秋）5年、晩年期（冬）5年と考え、事業を進めることを考えました。

今はすでに晩年期（冬）に入っている。

開業する前に、印刷業を若い時から経営していた高校時代の友人に、自分が開業することを告げた時、「事業を始めた後の丸子の生活費は、どこから捻出するのか？」と質問されました。即座に「資本金が500万円だけなので、すぐにもお金が底を着くので、当面は個人の資金で食いつなぐよ」と答えました。返ってきた言葉は、「お前、バカだなー。そんな気持ちで仕事をして、成功するわけがないよ。資本金500万円の会社のお金から、毎月の自分の給料を出さないでどうするのだ」と強い口調でたしなめられ、自分の考えの甘さ加減を恥じたことを思い出します。会社の資金も個人の生活費や小遣いもあいまいにした金銭管理ではダメだよ。事業はそんなに甘いものではないよ、という友人の貴重なアドバイスでした。

起業して今年で満17年になります。相模原市、大阪市、福岡市で、営業拠点を持つようになり、社員数も18名になり、来年は台湾に現地法人をつくり、ガラスフィルムや内装材の販売を通し、台湾の建築物の安全性と快適性に貢献することを念願としているところです。

(サンマルコ株式会社 代表取締役 <http://www.sunmaruko.co.jp>)

真田堀・昭和の青春

横原尚樹（1970年 経・経）



今から50年前の昭和39年、高校3年生だった私は静岡から上京し東京オリンピックのサッカー3位決定戦チェコ対ハンガリー戦を神宮の国立競技場で観戦した。その帰り、上智大4年生の兄に連れられて四谷の土手の上からグラウンドで大学生がサッカーの練習する様子を見て上智への志望を強くした。兄の話によれば、オリンピックの前年、日本サッカー育ての親である西ドイツのデッドマール・クラマー氏が真田堀グラウンドで上智のサッカー部員に特別指導をされ、シュートやパスの練習を見て「サッカーで大事なのはEXACTLY…」と言われたという。かのクラマー氏の一言は何とも「耳の痛い」お言葉であったろう。

翌40年、私は晴れて上智大学に入学を許されサッカー部に入部したところ、新入部員全員に丸坊主になるよう命じられた。体育会とはいえ、花の東京の上智大学がこんなに古臭い慣習を強いるのかと驚いたも

のだ。お陰で坊主頭で田舎者の私にはキャンパスを闊歩する Madchen はまぶしいばかり。授業を終えるとカマボコのクラブハウス（元のボッシュタウン跡）で練習着に着替えグラウンドに直行、暗くなるまで汗まみれ泥まみれの日々を過ごした。1年生の時の4年生中心の上智の活躍はすさまじく、1部校との入替戦出場をかけた法政大との決定戦には敗れたものの、関東サッカーリーグ2部（当時は8部構成）で同率優勝を遂げた。

大学正門前のトンネルからグラウンドに降りると自然に足の向く一角がある。地下鉄丸ノ内線四ツ谷駅のホームに向かって左サイド。私のポジションはレフトウイング。現在の日本代表でいえば、俊足を生かして左タッチラインをドリブルで駆け上がる長友選手のポジションである。これを阻止するのがライトバックで同期の山本三郎だ。試合を想定したフォーメーション練習での二人の攻防は自分で言うのも何だが圧巻だった。一気に縦を突くかフェントで交わして中に切れ込むか、山本も縦に抜かせるような振りをしながらスライディングタックルを仕掛けてくる。こん倒した私はこのプレーで太ももによくビフテキを作った。二人の勝負は5分5分だったと記憶している。ゴールラインまでドリブルで持ち込んで左足でセンターリングするのだが、腰の切れに難があり時々直接ゴールネットを揺るがし失笑を買った。だが、肝心の試合ではセンターリングで一度も相手のゴールネットを揺るがすことはなく悔いが残っている。

昭和42年、永年住み慣れたカマボコハウスからSPS会館に各クラブの部室が移転した。その頃から学内に紛争の火種がくすぶり始める。翌年6月には学生による一号館占拠にエスカレート。暮れに至って機動隊導入、4か月のロックアウト宣言で新聞紙上を賑わしたが、3部落ちの危機にあったサッカー部はそれどころではない。学習院大学との入替戦にやっとの思いで勝って先輩が築いてくれた関東2部の座を維持し危機を乗り切ったのだった。

その後、大学にも平穏な日々が戻りクラブ活動も息を吹き返した。サッカー部も32年以来2部で頑張っていたが、新人不足が慢性化しいよいよ正念場を迎えた。昭和48年、一橋大学に0-1で敗れ、ついに17年間守ってきた関東2部の座を明け渡してしまった。以来40年余、私も平成4年から6年間監督を務め何度か関東リーグ復帰を試みたが未だに果たせていない。

学生時代サッカーをやっていたよかったと思うことがある。4年次のゼミの選択に際し、少々敷居が高かったが高宮晋教授（経営組織論）を思い切って訪ねた。教授は、私の成績表には一言も触れず「日本のサッカーは強くなるかね。まあ、これからのサッカーは組織力が大切だからこのゼミで組織論を勉強しなさい…」と言われて入ゼミを認めて下さった。ゼミには大学院生や他大学の学究肌の方々も大勢出席され、教授がゼミ室に入られるとピーンと緊張した雰囲気になった。しかし、ゼミ室を一步出たところでは大変優しく、夏の赤城山麓でのゼミ合宿で日焼けされた教授は蕎麦を食べながら“ゴルフの魅力”について話をされたり、卒業を控えた4年生全員を府中市のご自宅に招いて下さり奥様の手料理をご馳走して下さい。後年、私の結婚披露宴で20分を超える教授のご祝辞、否ご講演？を賜ったが、司会者が何度も腕時計を見ながら複雑な表情を送ってきたことなどを懐かしく思い出す。毎年恒例の高宮ゼミのOBの集まりである“水無月会”で諸先輩・同期との高宮教授の思い出話は尽きない。

（上智大学ソフィア会常任委員兼組織委員長 元三共（株）勤務）

イスラエル巡礼旅行印象記

加藤春一（1968年 経・経）



この1月下旬、「聖地イスラエルの旅8日間」（テマサ・トラベル主催）に参加して、イスラエルを訪れた。今迄の人生で世界5大陸54か国を訪問し、55か国目が念願の当地訪問となった。カトリック信者として聖地にはことのほか関心があったばかりでなく、昔、商社時代に資源の仕事でユダヤ系企業と関わりがあり、一度彼らのルーツを訪ねてみたいと思っていた。

2年前、スイスのロスチャイルド銀行の社長インド人のドクターシン氏と会った時「グローバリズムとはユダヤ・キリスト教のことだ」とのコメントが脳裏に強く焼き付いていたこともある。

主な訪問地は以下の通りである。テルアビブ、ヤッホー、カエザリア、ガリラヤ湖、ナザレ、ベツレヘム、マサダの砦、死海、クムラン洞窟エルサレム、その他世界のIT企業の研究所地域。

全体の印象や見聞を断片的に以下に記してみる。

1. 今回、マサダの砦（注）を訪問し、さらにユダヤ教徒の聖なる場所「嘆きの壁」と「ダビデの墓」を訪れ、オリーブ山からエルサレム城壁の黄金門を眺めて、ユダヤ人が世界の中心がエルサレムにあると考

えていることがよく理解でき、実感できた。

黄金門はユダヤ教の人々にとってはメシアが到来する時に開かれると信じられ、メシアが訪れるのは日本を含むオリエントからとされている。

(注) ユダヤ人がローマ軍と3年間戦って破れた紀元後70年、この敗北を機に、ユダヤ人は世界に離散、1948年に再度建国したあと、ユダヤ人にとって聖地となった。

また、このオリーブ山から城壁の外、北側にロックフェラー財団が建てたロックフェラー考古学博物館が印象深かった。ロックフェラーは別名ローケンフェラーというドイツ、アシュケナジー系ユダヤ資本である。

三大宗教の聖地であるエルサレムを抱えて4千年の歴史を持つイスラエルは世界文明、国家、民族、宗教を考える上で、知的刺激に満ちていた。

2. イスラエルは小国(四国と同じくらい、人口約800万人)ながら、世界に圧倒的影響力を与えてきた。自然は狭い国土ながら変化と多様性に富み、雨量の少ない乾燥地帯が多いが多様な植物と鳥類に恵まれている。ユダヤ教徒75%、イスラム教徒15%、キリスト教徒2%、その他8%と、キリスト教発祥地ながらクリスチャンは2%とマイノリティーである。

3. ビジネス、巡礼者、観光客のトップは中国人、韓国人の様だ。死海で浮遊体験の時、30人近い韓国のキリスト教巡礼団が「アレルヤ」を唄って浮遊していた。また、帰りの税関チェックでは、今迄の経験では一番厳しい荷物チェック(約2時間)であったが、多くの中国人が検閲されており、10-20本のスコッチウイスキーやコニャックをトランクと別送に詰めていた。

中国(北京 香港)韓国(インチョン)とテルアビブ間で直行便があり、中国には約2千万人、韓国には約5百万人のキリスト教徒がいるため、それに経済的関係も密接になっていることなどから、中韓両国との人の交流が多いのであろう。

4. ベツレヘムと言ったキリスト教聖地や世界最古の都市エリコの周辺やゴラン高原の近くがパレスチナ自治区であった。入出国にあたりパレスチナの軍人が銃器を構えてチェックしたのは驚いた。ヨルダンに近いゴラン高原も訪問したが、未だ約3万発の地雷が埋まっているという。

5. 経済活動をみると、年間で約1千社のIT企業が起業されていて、アメリカ、ヨーロッパ、中国の企業がこれら企業の買収に熱心だ。ユダヤ人はベンチャー企業を立ち上げる才覚には長けており、特に以下3点が注目される。

- (1) ヘルツエリア(テルアビブ近郊)ではマイクロソフト、アップル、グーグル、インテル、フェイスブック等(マイクロソフトを除いて全てユダヤ人が起業)の巨大研究機関が林立していた。
- (2) テルアビブ工科大学は優秀なユダヤ人頭脳を集めており、10年後にはアメリカのマサチューセッツ工科大学並みになるであろうと言われている。その他生化学の研究も世界のトップレベルで、食糧生産も95%の自給率を誇る。また、優秀な企業人は18歳から男女双方とも全員徴兵制により兵役に服しているので(男性3年間、女性18か月)、兵役期間に頭脳、身心共に徹底的に鍛えられているという。
- (3) 世界のユダヤ人コネクションの間で情報、知識の伝播がなされ、世界最高の科学技術水準を維持、発展出来る。

(東京エグゼクティブ・リサーチ(株)相談役最高顧問)



エルサレム旧市街にある聖墳墓教会

ソフィアーズ・スキー合宿

伊達 万壽夫 (1977年 経・営)

事件は2014年2月14日(金)、18時から始まりました。今回で22回目を数えるスキー合宿(野沢温泉スキー場、2泊3日)は、24人乗り貸切りマイクロバスに10人が乗車して、大学北門を出発しました。運転手から「関越、東北自動車道が雪で通行止めです。常磐自動車道を利用して目的地まで参ります」との説明。

14日朝からの降雪と翌15日は雨という天気予報を信じてバス内では、さっそくワインで乾杯し、枝川さんが用意してくれた美味しつまみと料理で大きく盛り上がり、これから起きる歴史的大雪を誰も知る由がありません。その間、雪は止めどもなく降り続き、とうとう北関東自動車道も通行止め、そこで常磐道を降り、国道50号線に入り、高崎方面へ。それでも遅くとも15日の午前2時か3時には昔スキー部が合宿していた宿の「そおゆ」に着くと信じて、楽しい宴会はさらに続きます。しかし、50号線を西に行く



車中にて（前列左が筆者）

ほど降雪が多くなり、前橋市手前から徐行走行に。そろそろ「異変」に気が付き始めます。

次第に深夜になり、バスは高崎市内を過ぎ、安中を過ぎ、松井田付近で動かなくなり、バス内で一夜を過ごすことになりました。この時点でも、「異変」を感じつつも明朝には野沢温泉でスキーをと樂觀しておりました。

救われたのは、バスがストップした場所の近くにカラオケ店があり、トイレのお願いをして、全員無事、自然現象をクリアできたことです。一夜をバスで過ごした翌朝、一向に道路状況が判らず、このままでは横川を過ぎると道が狭くなり、Uターンも出来ないと思い、大変な事態になる前に引返すこととなりました。

停車していた道路中央の雪の盛り上がりも少なく、全員で雪を除去し、バスをUターンさせ、帰路につく。皆はやれやれ気分で、まだ余裕があり、予定より1日早く帰宅した場合の家族への言い訳など考えていたはずですが、私は「土曜の午後早く四谷に着いたら日本海庄屋で反省会をやりましょう」などとほざいておりましたが、高崎市内に指しかかると、80cm近い積雪と車の行き来がほとんどない風景が目に入り、驚くほど静寂な高崎市内でした。前橋に着いても状況は変わらず悪くなる一方で、前橋を過ぎ50号線に出た瞬間、通行止めにあい、Uターンをし、しばし運転手の休息のためコンビニで駐車し、食料飲料を仕入れ、全員でお昼と休息をとりました。さて、出発となると、バスが自重で雪を溶かし、駆動部の後輪の一輪が浮き上がり、スタック。地元の農家の人がトラクターで駐車場から引き出してくれました。なんとという優しさでしょうか。

50号は諦め17号で東京に向かおうとコンビニをスタート。しかし、ドラマはそう簡単に終わりません。順調に17号に出ましたが、深谷市内の手前で、まだ大型車のスタックで、停止。8時間で100mの移動。ところが、近くにガソリンスタンドがあり、土曜の夜から日曜の朝にかけてトイレを貸していただき助かりました。スタンドの人が気さくにトイレを解放して頂いたことで、日本人の優しさをまたも実感した次第です。とうとう2泊になり、みんな諦めの境地で、日曜中に四谷に着くことを祈るのみで、雪面から出た深谷ねぎらしきものを眺めておりました。日曜は良い天気、とうとうスタックした大型車が動き出し、無事熊谷駅に到着し、疲れた運転手から交代要員の運転手に代わり、一路四谷に向かい、午後3時に上智大学北門にたどり着いた次第です。

反省は、道路情報をよくよく調べ、出発前に中止する勇気が無かったことです。想定外とはどこかで聞いた言葉ですが、今回の一件はよくよく肝に銘じたことでした。

（株）コハマ・マテリアル代表、元横浜ゴム勤務）

経鶯会だより

上原隆一（1976年 経・営）

○経鶯会研究奨励金および奨学金授与

去る11月27日学部会議室において山田学部長、日引、西澤両学科長同席のもと経鶯会からは私と田村副会長が出席し、晴れの受賞者13名（成績優秀者奨励金5名、奨学金8名）を迎え授与式が無事終了いたしました。受賞者は緊張と喜びが綯交ぜとなった顔で一様に勇んでおりました。私は皆素晴らしい学生ばかりで、頼もしく且つ誇らしく感じておりました。

受賞者の中から経鶯会代議員を4年生の3名に引き受けてもらいました。若い世代の活性化につながればと願っております。

この素晴らしい制度は経鶯会会員の皆様の善意の賜物であり改めて深く感謝申し上げます。経鶯会のこの賞は他学部学科同窓会の手本ともなっており、経鶯会最重要事業の一角を成しております。引き続き会員各位の絶大なるご支援をお願い申し上げます。



○柔道初段位に挑戦

私事にて恐縮ですが私も還暦となり主治医から年齢的な衰えを指摘され、手軽にできる生涯スポーツを始めようと考えていたところ、エコノミアン編集長で柔道部OBの小泉先輩（タシケントの世界柔道で銅メダルを獲得した猛者）から「柔道をやらないか。一年で初段をとらせてやる」と声を掛けられました。「柔道なんて無理です」と一度は断りましたが、熱心にお誘いいただき「紀尾井町柔道クラブ」に入会しました。母校の柔道場を借りて定期的に稽古があり他の大学出身者も入会しているクラブです。その後、理化卒の柔道部OBで現在は他大学で教鞭をとる私と同期の萩原さんが共に初段位獲得を目指すことになり、共に汗を流し、投げの形を稽古し、昨年11月無事、講道館から初段位を授与されました。12月「紀尾井町柔道クラブ」の忘年会では名入りの黒帯と併せて嘉納治五郎先生の「精力善用 自他共栄」の色紙を頂戴したことは大きな喜びでした。

○5月のASFで会いましょう！

ことしもSJ ガーデンで経鸞会ワインパーティを開きます。5月31日（日）、お昼頃から。会費は無料。友達を誘って、ぜひお出かけください。経鸞会スタッフが、準備をして待ってます。

研究奨励金
受賞者

お礼のこたば

渡邊瑞穂（在学4年生 経・経）



このたび、私どもが頂きました経鸞会奨学基金に対するOB・OGの皆様のご厚意と、本日このような形でエコノミアン誌上に寄稿する機会を頂きましたこと、まずは深く御礼申し上げます。

（1）インターンシップを通じた国際交流

一昨年の夏から私が留学したオランダのロッテルダム大学は、ビジネス教育、特に実践面での教育に力をいれていました。具体的には、講義形式の授業だけではなく、在学中に数度、長期間のインターンシップをすることを学生に義務付けています。私も留学後半の約半年間は現地の日系企業でインターンシップを経験しました。

配置されたのは、会社内の研究室でした。与えられたプロジェクトは、そこで働いている研究者達の行う業務の中に必要のないプロセス、時間等の非効率性が含まれていないか調査し、明らかにすることでした。しかしながら、働き始めてすぐに、本当のところ、私に求められているのは「日本人の考え方・価値観」を、共に仕事をするを通じて、オランダ人スタッフの方々に理解してもらうことであると気付きました。社内には日本人はごくわずかしかおらず、私のいた研究室にはそもそもオランダ人の方しか働いていません。その為、日本本社からの指示に納得がいけないまま従い、現地スタッフが不満を募らせることも多々あったようです。そこで私はプロジェクトと並行して、様々な形で日本人の価値観の紹介に努めました。部署ミーティングで日本人の直接的でない物言いについて皆の前でプレゼンテーションをしたこともありました。また、日本人スタッフの言動が理解出来ないと主張するスタッフと根気強く、なぜその日本人スタッフがそう言ったのか説明することもありました。そういった取組みの結果、以前よりも日本人に対する蟠りはなくなっていったようで、インターンシップ最終日には皆が私の為に送別会を開いてくれました。異なる文化と価値観の壁を越えて共に働くことの大変さ、やりがいを教えてもらいました。



（2）卒業をひかえて

上智大学はその国際色の豊かさで知られておりますが、私の大学生活もその例にもれません。学部であれ、サークルであれ、多くの学生が国際的な視野を持って、自分の専門を学び、また活躍を夢見る姿に影響を受け続けた4年間でした。留学にあたっては多くの先輩、また教授に相談に乗っていただき、友人たちからはたくさんの励ましをもらいました。今後、様々な分野で国際社会に貢献する人材となり、上智大学の後輩たちに少しでも力となれるよう、頑張っ

－年会費納入のお願い－

同封の「払込票」にて年会費 3,000 円の払込をお願い致します。あわせて、寄付金によるご支援・ご協力をお願い申し上げます。